発行；1994年03月01日

寒冷地形談話会通信

▷事務局：〒184　東京都小金井市貫井北町4－1－1東京学芸大学地理学研究室小泉武栄研究室気付
酒井　啓（研究生）
TEL：0423－25－2111（内）2429
FAX：0423－26－3920

▷寒冷地形談話会例会

3／12（土）15：00～　於明治大学大学院駿河台校舎
八木浩司氏（防衛大学校地学研究室）
「白神山地について」

▷お知らせ

吉田栄夫先生（極地研）退官記念講演
演題：「私の南極フィールドノート」
日時：1994年3月30日（水）　15：00～16：15
会場：板橋区加賀1－9－10
国立極地研究所　講堂（6階）

上記についての問い合わせ先：極地研・森脇（電話　03－3962－4711）

▷山岳研究気象台2

“山岳研究気象台”は、山の研究に関する展望、評論、随筆などをつれづれなるままに書いていただく新コーナーです。

テフラを用いた斜面研究に関して、最近思っていること

西城　潔（東北大学理学部）

絶対年代資料の得にくい山地の地形の編年学的研究において、テフラは貴重な存在である。気候地形学における主要テーマのひとつである山地斜面の発達史に関する研究も、そのほとんどが大なり小なりテフロクロノロジーの恩恵に浴してきたことは、改めて指摘するまでもないだろう。

だが斜面発達という観点からテフラを扱う場合、注意しなくてはならないと思うのは、テフラの降下それ自体が斜面での地形変化に影響を及ぼしたかもしれないという点である。田村・野上(1977)は、テフロクロノロジーを用いた斜面研究に際しての基本的な問題点のひとつに、「テフラに覆われたことがそれ以後の斜面発達に何らかの影響を及ぼしていないか」といったことを挙げている。

テフラの降下が斜面発達に影響を与えた可能性については、これまでもいくつかの研究で触れられてきた。例えば檜垣(1987)は、北上山地において、最終氷期中に降下したテフラがソリフラクション堆積物のマトリックスとして有効に働いたと述べている。小口(1986)は、最終氷期中の zonalな周氷河地域よりも低所で周氷河性の斜面が形成された例を報告し、その原因のひとつとして、テフラの降下に伴う植生破壊、裸地の出現を考えている。またこれとは逆に、テフラの供給が少ない方が、寒冷気候下での機械的風化はより効果的に働き、斜面の形成が促進されるという見解もある（田中，1992）。いずれにせよ、テフラの降下は斜面発達と無関係ではなかったようだ。

筆者自身もフィールドとしてきた北上山地を例に取れば、純然たる「斜面堆積物」である角礫層よりも、いわゆる「ローム層」も含めたテフラ起源の物質

93-7

の方が、その主要な構成物質となっているような斜面が少なくない。こういう場合、角礫層の層位から斜面物質移動期を論ずるのはよいとしても、斜面そのものの形成という意味で言うなら、テフラの降下も大きな役割を果たしたことにはならないか？　もしもテフラの降下がなかったら、少なくとも斜面の形態は、現在見られるそれとはかなり異なっていたかもしれない。

筆者自身の例も含めて、これまで10^4 年オーダーでの斜面発達史については、過去の気候条件、特に最終氷期の寒冷気候を意識した気候地形学的なパラダイムから語られることが多かった。そしてテフラは、多くの場合単なる時間面指示者としての位置に甘んじてきた感がある。もちろん、テフラがごく稀に、しかもうっすらとしか積もらないような地域の場合には、それでよいということもあるだろう。しかし現実には、無視し得ない程の量のテフラ降下に絶えずさらされてきた山地が、日本では珍しくない。こうした条件を考慮すると、例えば地表面がテフラで覆われた斜面における物質移動や、テフラ降下によって斜面上の植生や土壌生成、地形プロセスが受ける影響などについても斜面発達史研究の視野に取り込んでいくことで、従来の解釈からは漏れてしまっていたかもしれない現象が、見えてくるのではないだろうか。

引用文献

小口　高(1986)：阿蘇カルデラ壁の斜面形成過程　－周氷河作用の影響の可能性．　地形，　7，185-196.

田中　眞吾(1992)：中国山地東部における後期更新世の山地堆積地形とその形成環境．　地理学評論，65A，180-194。

田村俊和・野上道男(1977)：テフロクロノロジーと斜面発達史．　日本地理学会予稿集，13，40-41.

檜垣大助(1987)：北上山地中部の斜面物質移動期と斜面形成．　第四紀研究，26，27-45.

文責：西城

C-3-1

事務局よりおわびと訂正

11月号に掲載された小口　高氏の原稿「寒冷ばかりではお寒うござる」の中に、事務局の責任による以下の誤りがありましたので、おわびして訂正いたします。

P.2 1.5　東京大学理学部地理　→　東京大学・大学院理学系研究科・地理
P.2 1.13　世界の諸産地　→　世界の諸山地
P.2 1.21　頭があがらなりがちな　→　頭があがらなくなりがちな
P.2 1.23　「非典型的な」　→　「非典型的」な*
p.3 1.21　健全といっても不健全な健全である　→　健在といっても不健全な健在である*
p.3 1.23　このこの責任　→　この責任
他に、オリジナル原稿にあった読点や字間の空白の欠落。
(*印は前回の会報配布時の正誤表でも指摘)

これらの誤りは、①小口氏から原稿をフロッピーディスクで受け取ったにも関わらず、それを用いずに事務局サイドで打ち直しをした、②打ち直し後の原稿について小口氏の確認を得なかった、の２つの原因により生じたものです。文末に「文責・小口」と書かれていますが、上記の誤りの責任は事務局サイドにあります。原稿の執筆を依頼した小口氏に対し、記しておわび申し上げます。